ATYPICAL FOOTPRINT

Archive 2012 - 2014

SIDE CORE

Akira Fujimoto | EYE | Kota Takeuchi | MADSAKI | Megumi Matsubara | Nicolas Buffe | Ōyama Enrico Isamu Letter
Ryo Matsuoka | Ryota Kikuchi | Shuhei Nishiyama | Takahiro Komuro | Taku Obata | TENGAone | Tohru Matsushita | yang02

Interview — 2013

Ryota Kikuchi

菊地 良太

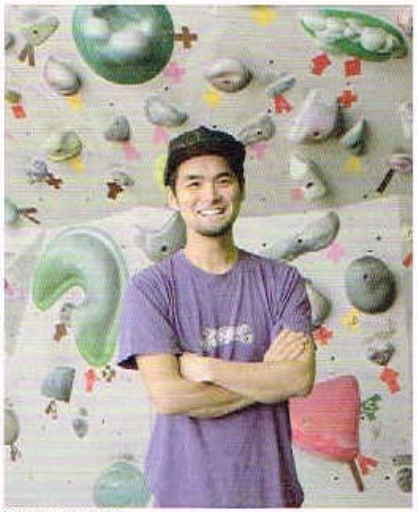


Photo by Ichiro Mishima

— Your pieces have a unique kind of simplicity to them. You use atypical methods like climbing buildings and structures in the city. How did you come about this form of expression?

I have been doing free-climbing since I was in high school, every time I see a wall I tend to look for a path that I could climb. I enjoy finding these paths, especially if it is a good one. But it is difficult to express this sentiment with people who have no interest in. I try to create pieces that everyone can enjoy and understand. I was curious to see what would happen if people partook in this activity, of finding paths, throughout the city. I have always understood art and climbing to be parallel entities, and so I experimented with connecting the two in my expression.

— Tell me about your piece "swing".

I came up with the idea for this piece when I saw a bridge. I photographed myself swinging on a rope underneath. I tend to come up with pieces after I see something in the environment, and I think about what I can do with them. I have been thinking about this piece for several years after I saw the bridge for the first time. I was thinking about how a bridge can be used, as a swing, for example, as opposed to simply something you cross.

— Your form of expression is taking photographs of yourself doing various performances. Have you ever thought of doing actual performances, or capturing them on video?

I feel that if I used video, it would be too similar to street performance, something I wanted to distance myself from. The thing that I like about photography is that you can show something at once in a single image. With video, it would take about 10 minutes just to show myself climbing. It's too long; not many people would want to watch the whole thing. I also don't see myself as a performer, and I do not want to be recorded as such. I am, however, still thinking of different methods of expression.

— If there were any connection between your work and graffiti, what would that be?

Like me, graffiti writers tend to look for spots that they could work with in the environment. I have seen graffiti drawn on risky places that make me think, "how did they do that?" I often take

swing, 2012

— 菊地さんの作品は、都市にある建物やオブジェに上ったり、通常想定されていない使い方をしたり、非常にシンプルでユニークな作品を作られていますが、こうした表現を始められた経緯を教えてください。

高校の時からフリークライミングをやっていて、壁があるとそこを登るためにラインを探すんです。良いラインとか良い岩を見つけるのが好きだったんですが、当然その感覚をクライミングをやってない人に伝えるのは難しいので、みんなのわかりやすい街や建物をモチーフにして、そのライン探しを街でやったらどういうアクションになるのか？というのを表現して作品を作っています。アートもクライミングもずっと僕の中では並列なので、当初からそれを混ぜて表現したいと思ってました。

— 第2回目の展覧会で発表された「swing」という作品について教えてください。

この橋を見たときに思いついたアイデアで、橋の下にロープを垂らしてブランコをこいでいる自分を撮影したものです。いつも実際に風景を見てから何ができるかを考えるのですが、この橋を見てから何年もずっとやりたいと思っていました。橋はただ渡るだけでなくて、こういうこともできるんじゃないかと考えて作品にしました。

— ご自身の活動を写真に撮って表現されていますが都市の中で実際にパフォーマンスをしたり、身体の動きをビデオで見せたりすることも可能だと思うのですが。

ビデオだと大道芸的に見られることがあって、それとどう区別できるかを考えています。写真の良いところは1枚でパッと見せられる。ビデオを使うと、登るだけで10分ぐらいかかるので作品にすると長すぎて展示しても最後まで観てもらえないことが多い。あと、自分がパフォーマーだという意識もないので、パフォーマンスの記録にもしたくない。しかし展示方法については正直まだ悩んでいるところです。

— 自分の作品とグラフィティに関連性を見つけるとすれば、どのような部分でしょうか。

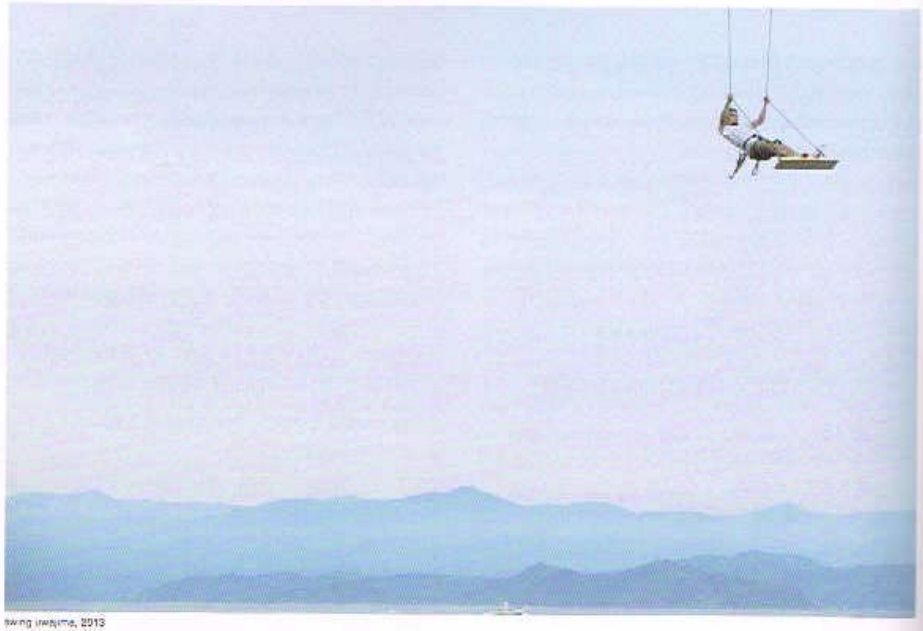
グラフィティのライターも描く場所をいろいろと探し回るようで、「あんなところにどうやって描いたんだろう？」と思うような危険な場所に描いているのをよく目にします。僕も作品を作るまでは常に散策して場所探しをします。そしてグラフィティのライターが現場に行く前に下絵を描くように、僕

AHOI, "Living" to wein notsiteteni

installation view of "Roppongi art night", 2014

walks looking to find interesting places I can work with. Just like graffiti writers draw sketchs before working on the actual site, I do not immediately start working on the spot. I do research beforehand, and think, in bed, of how to climb to the spot. In the climbing world, people are rated higher if they successfully climb on the first try, as opposed to people that practice at the same spot several times. Maybe this is why I am inclined to work this way. I don't do graffiti, but I do think that there is a definite connection in the act of climbing to various places and creating a photograph.

もいきなり始めずに下調べをして、夜、布団に入りながら頭の中でどう登ろうか考えます。クライミングの世界では何回も練習して登れるより初挑戦で登れる方が評価が高いので、そういう見方をしているのかもしれません。僕はグラフィティを描いたりはしませんが、実際にいろいろな所に登って写真を残す行為は、グラフィティと共通する行為だと思っています。



swing (swime, 2013

swing, 2012

— 菊地さんの作品は、都市にある建物やオブジェに上ったり、通常想定されていない使い方をしたり、非常にシンプルでユニークな作品を作られていますが、こうした表現を始められた経緯を教えてください。

高校の時からフリークライミングをやっていて、壁があるとそこを登るためにラインを探すんです。良いラインとか良い岩を見つけるのが好きだったんですが、当然その感覚をクライミングをやってない人に伝えるのは難しいので、みんなのわかりやすい街や建物をモチーフにして、そのライン探しを街でやったらどういうアクションになるのか？というのを表現して作品を作っています。アートもクライミングもずっと僕の中では並列なので、当初からそれを混ぜて表現したいと思ってました。

— 第2回目の展覧会で発表された「swing」という作品について教えてください。

この橋を見たときに思いついたアイデアで、橋の下にロープを垂らしてブランコをこいでいる自分を撮影したものです。いつも実際に風景を見てから何ができるかを考えるのですが、この橋を見てから何年もずっとやりたいと思っていました。橋はただ渡るだけでなくて、こういうこともできるんじゃないかと考えて作品にしました。

— ご自身の活動を写真に撮って表現されていますが都市の中で実際にパフォーマンスをしたり、身体の動きをビデオで見せたりすることも可能だと思うのですが。

ビデオだと大道芸的に見られることがあって、それとどう区別できるかを考えています。写真の良いところは1枚でパッと見せられる。ビデオを使うと、撮るだけで10分ぐらいかかるので作品にすると長すぎて展示しても最後まで観てもらえないことが多い。あと、自分がパフォーマーだという意識もないので、パフォーマンスの記録にもしたくない。しかし展示方法については正直まだ悩んでいるところです。

— 自分の作品とグラフィティに関連性を見つけるとすれば、どのような部分でしょうか。

グラフィティのライターも描く場所をいろいろと探し回るようで、「あんなところにどうやって描いたんだろう？」と思うような危険な場所に描いているのをよく目にします。僕も作品を作るまでは常に散策して場所探しをします。そしてグラフィティのライターが現場に行く前に下絵を描くように、僕

born, 2014

born, 2014